

# 平成17・18年度を振り返って…

## — 鹿屋体育大学の武道（剣道）教育の原点回帰 —

前阪茂樹\*

### A look back on 2005 and 2006: Budo (kendo) education at the National Institute of Fitness and Sports in Kanoya returns to its original point

Shigeki MAESAKA\*

#### Abstract

The National Institute of Fitness and Sports in Kanoya was established on October 1, 1981 as the first national university specializing in physical education in Japan, and welcomed its first students in April 1984. Since then, our school has had the distinction of offering a Physical Education and Sports Course (now known as the Integrated Sports Science Course) and a Budo Course in the Faculty of Physical Education. In addition, another major characteristic of our school is that we promote budo by focusing on judo and kendo and nurturing budo instructors. Based on our direction at establishment, we have strived to advance budo education and to nurture kendo instructors through the major in kendo in the Budo Course as well as the kendo club.

A quarter of a century has passed since the establishment of our university. Looking back at our history in 10-year units, BUDO (Kendo) education at the National Institute of Fitness and Sports in Kanoya can be considered to have finally matured into a foundation on which further progress can be made.

Zeami, a Noh play master from the medieval times, once said, “Shoshin Wasurubekarazu”. Given the current era, in which the principle of competition has been introduced both within and outside the university, and “improvement of competitiveness” has been adopted as a principle at our university in response to the constant need to make new developments, reexamination of the “roots” of kendo at our university by returning to our original point at establishment may be of crucial importance in promoting the education of budo, a traditional culture of Japan.

**KEY WORDS** : BUDO, Kendo, BUDO Education

#### はじめに

21世紀も早7年が過ぎた。国立大学も法人化して大学は新しい時代に確実に突入している。鹿屋体育大学（以下、本学）は、昭和56年10月1日に我が国初の体育系の国立大学として開学し、実際のスタートは59年4月から学生を受け入れて開校した。創設当初から続く本学の特色は、単科大学として体育学部の中に体育・スポーツ課程（現在

ではスポーツ総合課程に改称）と武道課程を設置しているところ（1学部2課程制）である。また、創設の理念の1つに「武道の振興：我が国の民族的文化遺産として伝承されている武道の振興を図るため、柔道・剣道等に重点を置き、武道の指導者を養成する。」とあり、それらの方向性を踏まえた上で、武道課程剣道専修（=剣道部）は、創設・創部以来変わることなく剣道指導者養成に邁進してきた。

---

\*鹿屋体育大学伝統武道・スポーツ文化系

本学の武道（剣道）教育は、大学創設時からその礎を創られた、初代教授である谷口安則先生（範士九段、平成2年3月退官）が、その後、平成2年～17年までを、國分國友先生（範士八段、故人）が、剣道専門講義・実習及び部活動顧問を担当されてきた。やや個人的にだが、10年単位で物事の流れを捉えると、本学の武道（剣道）教育は、今やっと成熟して基礎ができ上がり、それらを土台に更なる飛躍をしようとするときであるように思う。

「初心忘るべからず」とは中世における能楽の大家・世阿弥の言であるが、とかく大学内外で競争の原理導入の時代になり、本学に於いても「競技力向上」が掲げられ、めまぐるしくも常に新しいものが求められるなか、創設の原点に帰り、本学剣道の“幹”を今一度見つめ直しておくことは、日本の伝統文化である武道の教育を推進していく上で大変重要なことであると考えている。

そこで本稿では、本学剣道部の活動を概観しながら、

#### 1. 平成17・18年度を振り返って…【剣道部の公式試合（大会）での道のり】

2. 武道課程学生としての原点回帰  
以上、2点に焦点をあて、纏めてみたい。

#### 1. 平成17・18年度を振り返って…

##### 1-1. 本学剣道部の試合についての捉え方

本学剣道部が学生大会に参加した最初の頃、つまり昭和59年当初であるが、その頃私は本学の1年生（1期生）であった。代表選手として大会に出場するからには少しでも良い成績を残そうとは思ってはいたが、心の裏側では1年生チームだけで、大学剣道（特に全国）で通用する訳がないだろう…とも思っていた。只、私個人的には選手として大会に出場して試合に勝ちたいという思い以上に、鹿屋体育大学に入学し「あの谷口先生に毎日稽古をお願い出来るのだ。」という喜びの方が大きかったように思える。先生も「試合に勝て」などいっさい言われず、武蔵の“戦氣”の言を借りてよく、「試合は正々堂々と、“寒流月帯びて澄めること鏡の如し”の気魄を頭上満々脚下満々にみなぎらせて立合うのだ。」と教えていただいた。

初年度の公式大会での成績は、九州を制覇し、

表1. 公式対外試合を中心とした本学剣道部の年間活動計画

大会名	期日	場所	備考
全九州学生剣道選手権大会	5月上旬	福岡市	全日本学生選手権（男子）の予選。
全九州女子学生剣道選手権大会			全日本学生選手権（女子）の予選。
西日本学生剣道大会	5月下旬	福岡市	大会規模は、男女とも全日本以上。オープン参加。
西日本女子学生剣道大会			
南九州学生剣道大会	6月中旬	南九州4県（鹿児島・宮崎・熊本・大分）持ち回り	男子団体2チーム、男女個人戦。
全日本学生剣道選手権大会	7月上旬	東京・大阪	学生個人戦日本一を決める大会。東西対抗は各ブロックの代表選手を選考して勝ち抜き形式の団体戦。
全日本女子学生剣道選手権大会			
全日本学生東西対抗試合			
全九州学生剣道大会	9月上旬	福岡市	全日本学生大会（団体戦、男子）の予選。
全九州女子学生剣道大会			全日本学生大会（団体戦、女子）の予選。
全日本学生剣道優勝大会	10月下旬	東京・大阪	男子学生団体日本一を決める大会。
全日本女子学生剣道優勝大会	11月中旬	愛知	女子学生団体日本一を決める大会。
（その他の主な大会）			
全日本選手権（男子・女子）			各都道府県予選を経て出場。
国体（成年男子・女子）			各都道府県予選等・選考を経て出場。

全日本学生大会ではベスト8入賞という成績で1年生のみの出場にしてはまずまずであったろうと思われた。前途は比較的揚々としてみえたが、しかし、勝負の世界は実際に甘いものではない。その後の一度の全日本3位入賞の実績はあるものの、本学が全日本学生の男子団体戦に優勝するまで実に15年（平成11年に男子初優勝）かかった。それからであろうか、記憶は定かではないが、本学男子剣道部員にも「自分たちにも出来るんだ。」というような意思がこちらにみえるようになってきた。それまで本学の推薦入試等を経て、素材としてはいいものを持って入学してきても、対外成績的に本学女子剣道の評価に隠れがちな男子剣道であったが、この優勝をきっかけに具体的目標として「全日本入賞」から「全日本優勝」へと意識変革したのは間違いないであろう。

上述したような意識変革の流れの中で、九州地区に所属する本学剣道部の対外試合を念頭に置いた年間スケジュールは表1のようになる。

#### 1-2. 平成17年度の様相

平成17年度は、その前年までのメンバー構成にしてはふがいない成績の反省を元に、新たな主将のもと一念発起して、春期の九州遠征を計画し、精力的に稽古をこなしていた。その甲斐あってか、5月の全九州学生選手権では1・2・3位を独占し順調な滑り出しであった。毎年5月末に行われる西日本学生大会は大会規模としては全日本大会を上回る学生大会であり、本学男子剣道部は過去に5連覇を含む7度の優勝経験がある。前回大会が2位で今回も優勝候補として名が挙がっていた。特に今回は50回記念大会として特別に関東の強豪校を招待しており、全日本前哨戦を思わせる大会であったため気合の入り方は例年以上であったが、結果は立命館大学に初戦（2回戦）敗退であった（優勝は中央大学）。しかし、この敗戦が良い意味でのきっかけとなり、学生一人一人の普通の稽古にかける意識が高くなったようにも思えた。

学生剣道大会の場合、全日本のスケジュールは

先ず夏に個人戦があり、秋に団体戦があるといったものである。迎えた7月の第53回全日本学生剣道選手権大会では、芹川勝也（主将、平成17年度卒）選手が優勝し、本学出身者として初の栄冠に輝いた。以下が雑誌による大会評である。

「各地区の注目選手が序盤戦で姿を消す中、決勝まで昇り詰めたのは九州大会を敗者復活戦で制して出場権を手に入れた鹿屋体育大学の芹川。対するは関東大会覇者で3年生の鹿野（国土館大学）であった。決勝戦では延長で芹川が鹿野の面に胸を合わせて一本。4年生の意地を見せた。」<sup>註1)</sup>

これまで本学の大会実績で唯一獲得していなかった全日本学生男子の個人タイトルを獲ったことで秋の団体戦に向けての士気はいっそうに高まった。夏期休業中の強化稽古のときもメニューに従って「やらされる」稽古ではなく、自ら進んで「やる」稽古を精力的にこなしていた。九州の団体を制覇し、10月の第53回全日本学生剣道優勝大会に臨んだ。結果は、6年ぶり2度目の優勝旗を九州学連に持ち帰ることが出来た。内容的に競った場面は九州予選からいくつもあった。特に全日本準々決勝の中央大学戦では、いわゆる絶体絶命に近いピンチであったが、不思議と焦燥感は無かった。これは私が監督業に携わってから初めての経験であった。チームの逆境にあっても「彼らなら必ずやってくれる。」という気持ちになっていた。

思うに、明朗快活で強力なリーダーシップを持った主将がいて、回りの上級生がさらに盛り立て、引っ張る。下級生もそれに応えついてゆく。選手だけでなく部全体にもこのようなチームワークが浸透したとき、結果は別として最良の内容が追い求められるのではないかと感じる。三度の飯よりも剣道が大好きという者が多く、副主将の者などはどんな時も何食わぬ顔で1日に3～4回の稽古（学内・学外）を自ら求めてこなしていた。このようなチーム作りやコーチング経験はそうそう出来るものではないと思う。学生には本当に感謝したい。

## 1-3. 平成18年度の様相

前年度の男子の大会成績は西日本大会の敗退をのぞけば、九州・全日本の団体・個人とタイトルを獲り、満足のいく結果となった。しかもこれまで剣道部顧問・総監督として在職された教授の退職年度に華を添えたかたちとなり、多少なりとも恩返しが出来たようにも思った。しかし、裏を返せば今年度からが自分にとっての本当のスタートである。気持ち新たになると同時にやはり、常に「これでいいのか？」という気の迷いも交錯していた。そのことが影響してか5月の全九州個人戦は例年に比べて男女ともに芳しくない結果となった。男女ともに優勝者がでなかったのは平成9年以来9年ぶりのことであり、当然学生達の士気にも影響した(と思っている)。しかも2週間後には西日本学生大会が控えており、男女とも気持ちを入れ直して稽古した。自分自身も常に「師弟同行」の精神で、それこそともに汗を流し、遮二無二稽古した。試合については前日のミーティングで只一点「先をとる」ことを心がけさせて試合に臨み、なんとか男女とも優勝することが出来た。しかし未だ手探り状態でのたまたま掴んだ結果だったようにも思える。

西日本優勝後、主力の4年生達は教育実習の時期となる。これまでの反省点・試合内容等も含めて、1~3年生を鍛え直すべく、基本を見直そうと考え、意図的に試合稽古を少なくし、打ち込み・切り返し中心の稽古と形稽古を併習することを実践した。たとえ直ぐに結果に結びつかなくとも、信念を持ってやり抜くことが大事であると考えた。7月、基本重視の稽古へと見直した直後の南九州大会でなんと15年ぶりに男子団体戦で敗退してしまった。さらに全日本学生の個人戦もベスト16が最高で内容的にも揮わず非常に残念であったが、自分の気持ちは今までとは違い、揺らがなかった(学生はどうだか正直わからなかったが...)。そこで夏場に向けて、主将と話し合い「九州・全日本団体戦に向けて、昨年以上に稽古を積もう！そして走り込もう！」と意思の確認をし、実行した。

学生もよくついてきてくれたと思う。

全日本の予選である九州大会を昨年以上の勢いと内容で優勝し、さらに稽古を積み重ねている最中、突然の訃報が我々を襲った。師範の先生(元教授。平成17年退職後、師範に就任)の死去である。全日本学生大会の出発2日前の出来事であった。剣道部全員が放心状態、そして悲しみの中、しかしそれを選手は逆に力に変えるかのように、気魄を持って一戦一戦立派に戦い、2年連続で全日本学生決勝の舞台へと上がった。結果はリードして大将戦を迎えるも最後の最後で逆転され準優勝に終わった。私は、大会後のインタビューでは、「互いが死にものぐるいでやった結果。高取(主将、18年度卒。筆者註)で敗れたのであれば仕方ありません。」<sup>註2)</sup>と語った。このときばかりは心の底から、「結果としては残念だが、やるべきことはやってきた。学生達は立派によく頑張った。我々は敗者ではない。」と思った。

17~18年度の活動を振り返っての大きな収穫は、本学の剣道をどのような方向性で捉えるかということについて再認識出来たことが大きい。極論すれば剣道を勝負論として捉えるか、上達論として捉えるかであるが、本学の場合、他大学に比べてまだまだ歴史が浅い中、特に女子剣道において過去、全日本女子学生団体5連覇などの実績が先行してきただけに勝負論最優先の内容に偏っていたのではないかという思いが巡る。勿論、前人未到のこの実績に対しては非がつかない程素晴らしいと思う。しかし、これからは試合の実績結果だけではない「何か？」を学生剣道として求めねばならないと考えるきっかけを作ってくれたようにも思う。しかしながらこの再認識は剣道界としては正道的なものであるが、本学の理念である競技力向上、そして現代社会における競争の原理の導入、成果主義には馴染みにくいものになる。ここに私は武道とスポーツの本質的な違いがあるようにも思う。

## 2. 武道課程学生としての原点回帰

本学創設の基本構想の中に、「我が国の民族的遺産であり固有の文化である武道を振興することは、青少年の心身の鍛錬のためにも、国際社会における我が国の文化的評価を高める上においても重要な課題となっており、学校体育のみならず、今後振興が期待される社会体育の一環としても武道に関する優れた指導者の養成が求められている。...中略...また、柔・剣道等について伝統的な基盤を持つ九州地方の特性を生かし、武道に重点を置くほか...」<sup>註3)</sup>とある。つまり本学は、学校体育だけでなく、広く社会における体育指導者の養成、特に武道の指導者、そしてその種目は柔道と剣道の指導者養成に務める機関であると明言しており、おそらくはそのための1学部2課程であると安易に察することが出来る。このことを我々、武道担当教員は充分理解をして武道課程学生の舵取りを行なわなければならない。そして武道課程学生も本学の歴史、経緯、使命を理解せねばならない。さらにはこのことを明確に発信・広報し、武道の指導者を志す者を募らねばならない。

剣道の立場からいうと、全日本剣道連盟が制定する、剣道の理念・修錬の心構え・指導の心構え<sup>註4)</sup>の3つを理解し、実践すること。伝統文化としての剣道は「かた(基本)」を重視し、その技術の追求を元に競技性と求道性を包含しているものとする。剣道修行の目的は先ず、自己の心身の鍛錬つまり自分を創ることを目的としている。現代における試合は緊張状態の中でどれだけ日々鍛錬した自己を出しうるかという尺度で行なわなければならない。これは則ち、全日本剣道連盟試合・審判規則第1条にある「公明正大」に仕合うことに通ずるものとする。本学武道課程剣道専修の学生はこれを肝に銘じ、今後も大会(試合)に臨むに際して、礼節を重視して「正しく・強い」剣道を目指さねばならない。「道は尚も遠し...」である。

## おわりに

本学剣道の方向性を、近年の大会実績を通して顧みつつ雑感を纏めてみた。これら一つ一つがコーチングの要素に直接的に結びつくとは思わないが、次なる方向性を再認識することが出来た。それはやはり“原点回帰”しての武道教育の推進である。本学武道館の正面玄関には“武道館”(図1及び2)の金文字がある。これは初代教授の揮毫をもとに作成されたものであり、その精神は創設の趣旨を忘れることなく、本学が日本武道の殿堂たらんことを託してのことと伝え聞いている。それ故、今もその精神を忘れないように、必ず一礼して入館するようにしている。また、本学の2つの剣道場には「朝鍛夕錬」と「主一無適」<sup>註5)</sup>の言を掲げ部訓としている。これらの言に限らず、武道用語として引き継がれている言葉の真意を自得・体得できるようになるまでに、学生達と共に床を磨き、汗を流し、心を洗って稽古に精進するのみである。



図1. 本学武道館正面

本学武道課程の象徴的施設として昭和59年完成。本学メインストリート中央に位置する。



図2. 本学武道館正面玄関「武道館」の金文字

— 註 —

- 1) 剣道日本. スキージャーナル. (2006). 通巻363号: p160
- 2) 剣道日本. スキージャーナル. (2007). 通巻371号: p135
- 3) 鹿屋体育大学開学二十周年記念誌編集委員会. (2001). 開学二十周年記念誌 スポーツと健康の未来に向かって. 鹿屋体育大学: p142
- 4) 全日本剣道連盟

剣道の理念

剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である

剣道修練の心構え

剣道を正しく真剣に学び 心身を錬磨して 旺盛なる気力を養い 剣道の特性を通じて 礼節を尊び 信義を重んじ 誠を尽くして 常に自己の修養に努め 以って国家社会を愛して広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである

剣道指導の心構え

竹刀の本意

剣道の正しい伝承と発展のために、剣の理法に基づく竹刀の扱い方の指導に努める。

剣道は竹刀による「心気力一致」を目指し、自己を創造していく道である。「竹刀という剣」は、相手に向ける剣であると同時に自分に向けられた剣でもある。この修練を通じて竹刀と心身の一体化を図ることを指導の要点とする。

礼法

相手の人格を尊重し、心豊かな人間の育成のために礼法を重んずる指導に努める。

剣道は、勝負の場において「礼節を尊ぶ」ことを重視する。お互いを敬う心と形(かたち)の礼法指導によって、節度ある生活態度を身につけ、「交剣知愛」の輪を広げていくことを指導の要点とする。

生涯剣道

ともに剣道を学び、安全・健康に留意しつつ、生涯にわたる人間形成の道を見出す指導に努める。

剣道は、世代を超えて学び合う道である。「技」を通じて「道」を求め、社会の活力を高めながら、豊かな生命観を育み、文化としての剣道を実践していくことを指導の目標とする。

- 5) 朝鍛夕錬: 「尚も深き道を得んと朝鍛夕錬してみれば...」「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とする」出典は宮本武蔵の五輪書であり、百錬自得の精神を意味する。

主一無適: 出典は沢庵禅師の不動智神妙録であり、一つのことには精進し、他に心を適かさず、一心不乱になることで、「敬」の意味をもち、「礼」の根源である。